カトリック
# 広島教区報
No. 126
カトリック
広島司教区
発行責任者
広報担当
服部大介神父
「点訳版」あります。
お問い合わせください。
広島市中区幟町 4-42
広島司教館内
TEL（082）221-6017

## 教区の標語「きょうどう」と教会の「シノドス性」について

広島教区　アレキシオ　白浜　満　司教

### はじめに

第二バチカン公会議は、「旅する教会」という表現を用いて、この地上の教会が、天上の教会との一致という完成に向かって歩んでいることを教えています（「教会憲章」第七章参照）。この地上での旅の途上で、広島教区は創立百周年という大きな節目（二〇二三年五月四日）を一年半後に迎えようとしています。そのために、広島教区において十一年ぶりとなる第三回目の「教区代表者会議」（教区シノドス）は、創立百周年を迎える準備段階の一つの大きな教区行事です。代議員の皆様はもちろん、代議員を送り出されたそれぞれの共同体の皆様一人ひとりの霊的な交わりとご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。

堅信を授ける白浜司教
（廿日市教会　9月26日）

### 11月23日の「二〇二〇教区代表者会議」

新型コロナウイルス感染症の影響を受けて一年延期された「二〇二〇教区代表者会議」が、間もなく十一月二十三日に開催されます。再延期の意見もありましたが、コロナ禍にありながらも、前に向かってともに歩もうとするチャレンジ精神を大切にして、今回の教区シノドスは、約百五十名近くの代議員がオンラインで集会するという異例のケースとなります。今回の教区シノドスの主な目的は、教区創立百周年後に、教区として目指して行くべき宣教司牧の目標や優先課題について話し合い、具体的な提案をいただくことです。

今回の教区シノドスでは、「福音宣教」・「平和」・「多文化共生」・「協働」・「養成」という五つの分科会に分かれて、以前実施したアンケートの内容を集約して練られてきた提言案を最終的なものとする協議がなされます。教区代表者会議の前に、各分科会では、メールやオンラインを通して、すでに意見交換をおこなってくださっていることを伺っています。心から感謝申し上げます。

司教メッセージ・じゃけえのう・教区代表者会議　一・三面
平和行事　四面
J―CaRM　五面
地区・海峡からの風・一粒会　六・七面
青少年・ひと粒　八面

## じゃけえのう

「じゃけえのう」とは広島弁で「だからね！」という意味。

本校では、入学間もない生徒たちが宗教の授業や終礼での祈りに加え、戦後の復興を願い本校を設立したシスター方の思いを学び、世界平和記念聖堂での創立者記念ミサを高校三年生と共に与るところから、カトリック学校で蒔かれる種を育て始めます。

ところが、聖堂訪問だけでなく、日課・学校行事など、この数年間、災害・感染症拡大などで学校は大きく変わり、根本から問い直されました。命を守るための最善策を練りつつ、時に苦渋の決断を告げたときの各行事実行委員や係を含めた生徒たちの涙、落胆を何度となく目の当たりにしながらも、状況を理解し、助け合っている若者たちを前に…。

しかし、「神は試練と共に逃れる道をも備えてくださっています。」昨年度の経験も踏まえ、少しずつ活動の可能性を拡げています。皆様のおかげで一学年だけでも聖堂訪問を実施、配信ミサのお世話にもなりました。五感を使った体験は替えがたく、平和公園・大久野島・蒲刈島でのフィールドワークや九州研修、クリスマス行事などを準備中です。

「わが命つきるとも」映像も静修や宗教の授業で視聴し、感動を新たにしました。

さらに、先ほどの映像では、かつての放送部によるチースリク神父様へのインタビューが採用されたことから、後輩部員は当時の状況を掘り起こしています。図書委員は「祈りの環プロジェクト」を立ち上げ、国内外のカトリック学校約七十校の祈りの場をデジタルフォトブックとして作成し、各校の聖堂や宗教行事などの素晴らしさを分かち合いました。（本校HPをどうぞごらんください。）

平和活動同好会（P-step）やカトリック研究会も、教区平和行事に参加したり、他校と平和についてオンラインで話し合ったりして、新たな世界を切り拓いています。私も、校内に留まらず、教会の皆様、日本カトリック学校連合会やパレスチナの女性支援活動など「備えてくださっている道」の種を活かしてまいります。

ノートルダム清心中・高等学校
校長　神垣しおり

## 広島教区の「教区代表者会議」の流れ

ここで一つ皆様に説明が必要なことがあります。それは、アンケートの内容から導き出された五つの分科会のテーマについてです。このうち三つは、二〇〇五年十一月二十三日に開催された第一回目の「二〇〇五教区代表者会議」を受けて、二〇〇六年の復活祭に三末篤實司教様が公布された司教宣言の中で、「平和の使徒となろう」を、広島教区の固有の召命と宣言され、その実現のために、「平和」・「きょうどう」・「養成」を「三つの柱」に位置づけられたことに関連しています。その五年後に開催された第二回目の「二〇一〇教区代表者会議」（二〇一〇年十一月二十三日）に応えて、三末篤實司教様が二〇一一年の復活祭に公布された司教メッセージの中で、「きょうどう」について、次のような説明があります。

2010年に行われた教区代表者会議の様子
左、三末司教（当時の教区長）

「『二〇一〇広島教区代表者会議』は、二〇〇六年宣教司牧に関する司教宣言『平和の使徒となろう』からの歩みを振り返って分析し評価するとともに、現状を認識して共有し、これからの広島教区の福音宣教活動の方向性を見直し、展望するために開催しました。テーマは『きょうどう～今、神さまの呼びかけに応えて～』でした。分科会では、小教区の中の『きょうどう』、小教区を超えた『きょうどう』、社会との『きょうどう』、在住外国人との『きょうどう』について活発に意見が述べられ、有意義な提案が出されました。司祭・修道者・信徒相互の『きょうどう』も含めて、共同・協同・協働こそが、広島教区が緊急に取り組む課題です。」

2010年に行われた教区代表者会議の様子
（世界平和記念聖堂）

この司教メッセージによって、三末篤實司教様が使用されていた「きょうどう」という平仮名表記に、共同・協同・協働という三つの漢字をあてることが可能であることが分かります。これら三つの漢字に込められている具体的な説明はありませんが、手元にある国語辞典（『広辞苑』第四版）によると、①共同は、「二人以上の者が力を合わせること」、②協同は、「ともに心と力を合わせ、助け合って仕事をすること」、③協働は、「協力して働くこと」という意味があるようです。これまで広島教区では、これらの意味を包含して「きょうどう」という標語を、使用して来たのではないかと思います。

三末篤實司教様の後に、広島教区の司教に任命を受けた前田万葉司教様（現・大阪大司教・枢機卿）の時代（二〇一一年九月～二〇一四年九月）は、三年間という短い期間でもありましたので、「教区シノドス」は開かれませんでした。しかし、二〇一三年には教区創立九〇周年にあたり、教区創立百周年に向けて、「家庭へのチャレンジ」（二〇一四年度～二〇一六年度）、「教会へのチャレンジ」（二〇一七年度～二〇一九年度）、「社会へのチャレンジ」（二〇二〇年度～二〇二二年度）という、三年毎の教区の宣教司牧の目標が設定されました。そして、とくに①青少年の育成、②召命促進、③教区共通の要理書の作成、④津和野の証し人の列聖運動などに力を注がれました。現在、わたしたちは、「社会へのチャレンジ」の二年目を、一緒に旅していることになります。

## 「きょうどう」の進展のため

前田万葉司教様（当時）の後継者として、わたしは二〇一六年九月に、広島教区の皆様とともに旅する仲間に加えていただきました。広島教区に赴任して、わたしは間もなく教区の司祭団と話し合いを進め、「きょうどう」（共同・協同・協働）の進展のために、二〇一八年度から「協働体制」を広島教区に導入しました。この際に、三末篤實司教様が用いられた「きょうどう」に関連して、「協働体制」という名称にしましたが、この頃から、重要な三つの柱の「きょうどう」を「協働」に代えてしまったという批判を受けました。また、今回の教区シノドスにおいても、「福音宣教」・「平和」・「多文化共生」・「協働」・「養成」という五つの分科会でも「協働」という漢字が用いられています。

このように、豊かな意味を含む「きょうどう」

を「協働」にしたのは、二〇〇六年の復活祭に、三末篤實司教様の司教宣言の中で、「平和」・「きょうどう」・「養成」を「三つの柱」に決定されたことの変更ではなく、「きょうどう」（共同・協同・協働）の一つの側面である「協働」をクローズ・アップしたものであることを、ご理解いただきたいと思います。ただ、「三つの柱」という表現が、教会の根本的な三重の使命である「預言職（神のことばを伝える）」・「祭司職（すべての人の救いの恵みを祈る）」・「牧職（隣人に奉仕する）」との混同があったかもしれません。これらの「平和」・「きょうどう」・「養成」は、教会の三重のどの使命を果たすにしても大切にされるべき心の態度（精神）ということができるからです。

## 教区代表者会議（11月23日）リモートで開催されることに決定

コロナ終息が見通せない中、集まらず
インターネット（ZOOM）を使って各地から参加

9月11日に開催された代表者会議実行委員会において、コロナ禍の中の開催方法について検討を行った結果、当日（11月23日）の開催方法をリモート形式で行うことに決定した。また提言案に関する採決も行わず、代議員の分かち合いを中心に代表者会議を進める。

各小教区や団体で事前に行うことになっていた提言案への意見募集も、教会活動が十分に行えないという背景から、できる範囲で行っていただくこととなった。

### 教会の「シノドス性」のイメージ

ところで、前号の教区報でもお知らせしたように、教皇フランシスコは「ともに歩む教会のため―交わり、参加、そして宣教」というテーマで、二〇二三年十月に世界代表司教会議（世界シノドス）第十六回通常総会を開催することを宣言されました。世界シノドスの準備文書は、シノドス性（シノダリティ）を、「ともに歩む」・「ともに旅をする」という表現で説明しています。そして準備文書は、このシノドス性（ともに歩むこと）が、「教会の王道」であり、「神が第三千年期の教会に期待しておられる歩み」である（9～10番参照）と教えています。わたしたちは、教皇フランシスコが強調している教会のシノドス性（「ともに歩む」）についての理解を深める必要があります。そのために、準備文書の第三章に示されている聖書的なイメージが、その一つの手段となります。まず、準備文書は、「主に従い、霊に従順でありながら、ともに旅をする」（16）という表現を用いて、主イエス・キリストを「絶対的な主人公」として、聖霊に導かれて歩むという教会のシノドス性の基礎を教えています。そこに、主イエスがともに歩むように招く人々（群衆）と、その人々に奉仕するよう召された使徒たちが登場します。準備文書は、この「イエス」・「群衆」・「使徒たち」という三者が、「聖霊に照らされてともに歩む」ことの大切さを説いています（17～20参照）。また準備文書は、この三者の交わりを分離させようとする第四番目の敵役（誘惑）の存在が、聖書の中に登場することも伝えています。そして、この敵役に惑わされないために、使徒たちと群衆は絶えず、聖霊の識別による「継続的な回心」が必要であり、エルサレムで行われた最初の使徒会議はそのためであったと、準備文書は述べています（21～24参照）。

### 教会の歴史の中で

準備文書は、教会の歩みの中で、第一の千年期には、シノドス性はよく実践されていたのに対して、第二の千年期に「教会は位階的な機能をより強調するようになった」と述べていますが、そのシノドス性は継続して残っており、第二バチカン公会議が、シノドス性を呼び起こしてくれたことを明らかにしています（11～13参照）。

第二バチカン公会議後に、司牧者たちが神の民の声を聞くため、教区・地区・小教区の各レベルでの宣教司牧評議会や教区代表者会議などの制度が設けられ、実践されています。同時に準備文書は、司牧者によるこのような神の民からの意見聴収は、「教会内で多数決の原理に基づく民主主義の力学を前提とするものではない」（14）と教えています。

### 教会の「シノドス性」とは

教会の歴史を振り返ってみたときに、シノドス性の本質は、聖職者中心主義でも、信徒中心主義でもな

く、聖霊に導かれて互いに心を開いて対話し、福音の中に示されているキリストの声を聞き分けながら（キリスト中心主義）、「ともに歩む」ことであると理解することができます。また準備文書は、教会のシノドス性が「教会会議や司教総会を開催することや、教会内部の単純な運営以上のもの」であり、「教会のメンバーが皆ともに旅をし、集いに集まり、教会の福音化の使命に能動的に参加するとき、交わりとしての教会の存在を明らかにする」（10）と述べています。そして準備文書は、「洗礼を受けたすべての人は、多様で、秩序づけられた豊かさをもつ、それぞれのカリスマ、召命、奉仕職を実行することによって、キリストの祭司職、預言職、王職に参与し、個人としても神の民全体としても、福音化の能動的主体となる」（12）と教えています。さらに準備文書（13）は、「教会の特定の生き方と生活様式」の模範として、初代教会の信者たちが「使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心」（使2・42）であり、「すべてのものを共有にし、財産や持ち物を売り、おのおの必要に応じて皆がそれを分け合った」（44～4a）ことを紹介しています。

**教区の標語「きょうどう」と教会の「シノドス性」**

このように教皇フランシスコが強調する教会のシノドス性は、教区の標語である「きょうどう」を包含する豊かな内容であることが理解できるのではないかと思います。そのために一つの可能性として、わたしたちは、「きょうどう」を「ともに歩む」という標語へと発展的に移行することができるかもしれません。教区代表者会議を通して教区民の皆様からいただく提言を受けて、教区創立百周年後の、教区の宣教司牧の目標を考える際に、今回、世界シノドスの準備のために振り返るよう強調された教会の「シノドス性」の意味を反映させていくことができればと思っています。

## 二〇二一　平和行事「平和の糸を紡ぐ～わが命つきるとも」

酒井陽介神父

今年の平和行事は、新型コロナウイルスワクチン接種の進展によって広島教区外からの参加ができるようになるかもと期待したが、デルタ株の広がりのため、昨年と同様、教区外からの参加は司教様方だけになった。そして、参加人数を制限して事前申込者に限り、参加できない方のためにオンライン配信を併用した。

八月五日は、本年二月から平和公園にある国立広島原爆死没者追悼平和祈念館（以下、追悼平和祈念館）で、被爆したイエズス会神父様方を特集した企画展「わが命つきるとも―神父たちのヒロシマと復活への道―」が開かれているので、長束修練院で献身的に被爆者治療にあたられたアルペ神父に焦点を当てた。テーマも企画展にあやかって「平和の糸を紡ぐ～わが命つきるとも」とした。

白浜司教の挨拶につづき、アルペ神父についての二件の基調講演を行った。一件目は、教皇庁立グレゴリアン大学の酒井陽介神父（イエズス会）、二件目は録画によるカンガス神父（イエズス会）によるお話であった。酒井神父は、神学生時代からアルペ神父について研究をされていて、カンガス神父はアルペ神父の補佐として働かれており、どちらも貴重でありがたい話だった。

左から、福田さん、深堀神父、橋本さん

分科会は二件行われ、一件目は、追悼平和祈念館学芸員の橋本公（いさお）さんによる企画展についてのお話で、ほとんどの信徒が知らないこともお話していただいた。そして被爆者である深堀神父、福田さん（祇園教会信徒）と鼎談（ていだん）された。もう一件は観音町教会信徒の朴南珠（パクナムジュ）さんの被爆証言だった。

平和祈願ミサは、福岡教区のヨゼフ・アベイヤ司教の司式で、新教皇庁大使のレオ・ボッカルディ大司教の説教とご挨拶があった。ミサの後、平和公園の供養塔前で日本聖公会との合同での平和の祈りがあり、広島学院の高校生たちによる平和の誓いが述べられた。

六日は、アーサー・ビナードさんの紙芝居「さがしています」の朗読につづいて、原爆とすべての戦争

犠牲者のためのミサ、ビナードさんの講演「イエスらしい生活様式」があった。そして午後からは、流川教会でプロテスタントとの合同でキリスト者平和の集いがあった。

九日は、白浜司教司式による長崎原爆犠牲者のためのミサが執り行われた。

今年もコロナ下での開催であったが、クラスター発生はなく、安堵した。被爆者の高齢化による証言者集めが年々難しくなり、広島で平和行事を行う意味をどう見出すか課題に思う。来年は教区内外から安心して参加できるように新型コロナの終息を祈り、今後も平和の糸を紡いでいけるよう願っている。

（平和行事実行委員長　栗栖　徹）

## 津和野教会（島根県）聖堂保存修理工事完了

津和野教会の聖堂は一九三一年、ドイツ人シェーファー神父（イエズス会）のもと、長崎の大工川原正治によって建てられ、一九九六年には、国の登録有形文化財として登録されています。

聖堂は雨漏りに悩まされた歴史がありました。文化財建造物の修理はその建物の当初に復原するとされています。今回の修理保存工事では主に、①雨漏りによる腐朽箇所の修理を行った後、十字架を含む屋根廻りを銅板にて葺替え、②外部既存吹付材を取剥がし、外壁クラック箇所や装飾破損部を修理の上、全面吹付を施し、③尖塔の傾斜については修理範囲が大幅に拡大することから是正を行わず、補強により傾斜の進行を止める措置を施しました。

建物の彩色については古写真や塗装剥離後の痕跡などから創建時の色を検証しながら候補を絞って試し塗りを行い、津和野教会の信者さんたちのご意見も伺って決定しました。結局創建当初の色は大まかなところまでは判明しましたが細部が不明であったことから、カラー写真が残る昭和中期の彩色を再現しています。

修理保存工事にかかった費用は、およそ五千七百万円。乙女峠友の会会員等からの寄付、国からの補助金、津和野教会の自己資金で賄いました。

きれいに復元された聖堂

## J-CaRM広島便り　J-CaRMユニティ　岡山鳥取

担当司祭がロイ神父様からジョン神父様に変わりました。

コロナ禍の中でなかなか集まる事が出来ませんでしたが、やっと八月二十九日（日）にリモート会議を行うことが出来ました。

その中で、コロナ禍による外国人困窮者について尋ねると、教会に来ている人たちは比較的安定しているようで、特に困窮の情報は入ってきていません。

また、活動がしにくい今年は「これからの活動に備えて学んでおく」（オンラインセミナー等）という事になり各自で勉強をする事としてメンバー間で、推薦したい学習情報があれば担当司祭と相談の上、メンバーに配信し各自参加してもらうことにしました。

そのような中でも、ユニティとして応援している日本語教室は数名ですが、現時点でも、岡山教会はリモート、水島教会は一時的に休止、笠岡教会は対面にて行っています。

リモート会議の様子

笠岡教会での会議の様子

# 地区便り

## 岡山鳥取地区

### ＊オンライン飲み会開催

岡山鳥取地区青年連合として、オンライン飲み会を開催しました。二十四～三十三歳の六名の参加です。話の主な内容は、どうすれば私たち青年がもっと教会に行きたくなるかというものでした。幼児洗礼と成人洗礼と、それぞれの視点で話を深めました。

「年が近い人がいること」「『よく来てくれた！』と歓迎してくれる人がいること」「それほどハードルの高くない役割を与えてくれる人がいること」、このいずれかの人がいれば、教会に足が向く、という結論に至りました。私たちも信徒である以上、いずれは将来の教会を担っていく者として、幼児洗礼の子どもたちや洗礼を受けた若者たちが継続的に教会に来れるよう、自分たちが導いていけるように準備しなければならないと認識しました。次回はさらにメンバーを増やし、司祭やシスターにもお声かけできたらと画策中です。

オンライン飲み会の様子

## 広島地区

### ＊聖体授与の臨時の奉仕者養成委員会

一九七三年教皇庁典礼秘跡省、日本では一九九四年司教総会により「聖体特別奉仕者」として施行され、二〇〇七年呼称が「聖体授与の臨時の奉仕者」と改められました。

信徒の奉仕職が神の民共通のものであることを再認識し、信仰共同体がさらに豊かなものとなることを目的とするものでした。

広島地区の聖体授与の臨時の奉仕者養成講座は今年二十六期を迎えます。奉仕者は司祭による四回の講話を受講の後、司教様から任命され、その後は一年に一回、フォローアップ研修を受けて養成されています。

昨年の三月から新型コロナウイルス感染が全国的に広がり、広島教区でもミサが非公開となり、また、高齢者・病者のもとに訪問することも難しくなり、私たちの活動も休止していました。共同体が主日に集えないことはとても悲しく、人と人が距離を取り、今までのような触れ合いができない中で、特に高齢者・病者の方々のことが気になっておりました。

現在、高齢者のワクチン接種が進み、多少収束しつつありますが、感染しても無症状の方もおられ、また、いつどこで集団感染が発生するかわからない状況は、今後まだ一～二年続くとも言われています。

高齢者・病者が共同体に参加しにくい状況が長期間続くことを考えた時、『聖体授与の臨時の奉仕者』の役割はますます重要になってきています。

コロナ禍で高齢者・病者が孤立しないよう、広島教区における聖体授与の臨時の奉仕者のための新たなガイドラインを二〇二〇年九月広島教区典礼委員会が作成してくださり、広島地区でもそれに沿って現在活動をしています。

私たち「聖体授与の臨時の奉仕者」も高齢者・病者のもとにご聖体をお届けし、お話をさせていただき、勇気づけ

## 海峡からの風 61
### 下関労働教育センターだより

以前からお知らせしているセンターを中心とした「いのちの関門ネッツ」そう、ようやく名前が決まりました。セーフティネット・ネットワークで「ネッツ」、中途半端な、否、中庸の街下関では本当に痒いところに手が届かず、北九州にかなりの部分を頼ってしまう現状を従容として受け入れ、名前に堂々と関門と名付けることになる。この活動に強力なアイテムが加わって華々しく活動を始めるわけだが、詳細は次号へ。

これに先立ち、こども食堂・こどもの居場所づくりの活動団体で「下関こどもの居場所づくりネットワーク協議会」を立ち上げた。二年前からSNSを通じて情報交換や協力を続け、またコロナ禍も影響して各所でこども食堂・居場所づくりの活動が萌芽、二十程度の団体が現在ある。下関市の中学校区が二十二なのでこどもたちにとっては比較的身近な存在になりつつある。現在は弁当等の配布中心の活動だが、本来は地域の人々と共にこどもたちが良い環境で時間を過ごすことができる空間、そこに食事やおやつ、学習や遊びを通して成長を見守る場を目指し、協議会として相互協力や協働、共同購入、ファンドレイジング、そして自分たちの学びの場を提供していければと願っている。

もちろん「ロクスひよりやま」もメンバーだが、事情があって集うことのできない家庭への宅配や大学生との協働など、出色の存在である。

また五年前から居場所づくりをされている団体では、卒業生が大学生や社会人としてサポートに入って来ているとのこと。もう少し踏ん張れば彼ら彼女らが中心になって地域のこどもたちを支えてくれる。

同じことが私の支援するケニアのスラムの学校でも起っている。ハイスクール進学を支援する基金を作り、さらには大学進学をも支援するようになり、彼らが卒業し、学校を手伝い、社会人として支えてくれるようになって来ている。日本で支える会を立ち上げて六年、当初頭を抱えていた現地運営スタッフの人材育成が一気に進んでいる。

もう少し踏ん張れば…だな。

大城　研司

られることが沢山あります。聖体拝領を希望される場合は、遠慮なく所属教会までご連絡いただけたらと思います。

①今まで訪問させていただいていた高齢者・病者の方々

・本人や家族が訪問を希望するかどうか、また、介護施設などに入所されている場合、入所先を訪問することが可能かどうかを確認します。

↓訪問が可能な場合、主任司祭または今まで訪問していた聖体授与の臨時の奉仕者と連絡を取り、訪問日時を相談します。

②コロナ禍で教会に来られなくなり、聖体拝領を希望している高齢者・病者の方々

・聖体拝領を希望されている方は、まず教会（主任司祭）へ連絡します。

↓司祭自身が訪問するか、主任司祭から連絡を受けた聖体授与の臨時の奉仕者が訪問します。

それぞれの小教区により異なる点もあると思いますが、参考になさってください。

## 山口島根地区

### ＊コロナ禍の山口教会における奉仕活動

山口教会には、病人奉仕グループという歴史が古い活動団体があります。今コロナ禍の影響を受け、発足以来の大変な経験をしています。COVID-19の感染力、病状の性質を考えた時、この災禍の収束が見える迄、活動を完全に休止させてしまっても良いのではないかと一時は迷い考えていました。しかし、今まで皆さんがいかにご聖体を待ち望み、私たちの訪問とお話の時間を楽しみに待っておられることを長年の積み重ねの中で感じていました。

そこで、その時々の感染状況に応じ、ご自宅でご聖体を望まれる方の所へでき得る限り訪問することを決め、お玄関で簡単なお祈りをし、ご聖体を授かられた後、数分間近況などの分かち合いをして辞去します。そこにはイエス様が確かに存在し、皆さんは心の中でそれを喜び感じているのではないでしょうか。

小さな奉仕かもしれませんが、私たちはイエス様と共にこの活動を地道に続けていきたいと考えております。

## 広島教区一粒会（司祭養成後援会）について

日頃より、一粒会活動への献金・お祈りのご支援を頂きありがとうございます。一九八八年に一粒会が創設され、以来、司祭の召し出しと成聖、神学生の養成を目的に活動しています。日本のカトリック教会司祭が高齢化・減少の中、広島教区は現在、韓国・ベトナム・フィリピン等多くの国からの協力のもと司牧が進められています。外国から来て頂く司祭、神学生候補者の日本語学習支援、また、召命の集い、召命学校十代クラスの支援を通じて、若者に召命を考える機会を提供しています。

司祭になるためには、最短七年半の養成期間が必要です。神学生の学費、生活費、神学院の維持費のすべては、皆様の尊い献金によってまかなわれています。一粒会会員の皆様の祈り、召命の恵みに感謝いたします。『一粒会』への献金は各教会で行っていますが、香典返しや記念日の形で個人でも行えます。

一粒会献金封筒又は、郵便振替口座をご利用ください。

郵便振替口座
カトリック広島司教区一粒会
01310-1-69319

振込用紙が必要な方は、郵送いたしますので、教区本部事務局までご連絡ください。
※詳しくは、教区本部（082-221-6017）へおたずね、ご相談ください。

「神様のための高貴な奉献」

私は常に一粒会の信者の方々の祈りと物質的な奉献に対し、感謝の気持ちを持っています。皆様の祈りと物質的な奉献がなかったら、私は司祭になることができなかったはずです。

一粒会の皆様！このように、皆様は広島教区の召命の苗代を担当する、重要な役割を果たしていらっしゃいます。皆様が教区の神学生のために奉献してくださっている祈りと物質的な奉献は、過去にもそうだったように、現在にも、そして未来の教区の召命のためにも、決してなくてはならない神様のための高貴な奉献だということを忘れないでください。

皆様が奉献してくださった、その愛に応えるために、私も忠実に司祭の道を生きて行こうと思います。

朴　根培　神父（徳山教会）

## ―感　謝―

故　樽原正登様（福山教会）と故　樽原壽子様（福山教会）から遺言による生前の意志により一粒会にご寄付がありました。ご報告とお礼を申しあげます。

広島司教区一粒会

## 教会巡礼・聖書通読写経キャンペーン 完了者紹介（敬称略）

教会巡礼を完了された方
- No.047　山縣　隆宏　幟町教会
- No.048　山縣　典子　幟町教会

聖書通読を完了された方
- No.009　堀江　京子　廿日市教会

旧約聖書写経を完了された方
- No.005　堀越　瑶　水島教会
- No.006　高橋　陽子　祇園教会

新約聖書写経を完了された方
- No.022　平戸美津子　益田教会
- No.023　堀越　瑶　水島教会
- No.024　神原　照子　福山教会

# 青少年の活動

## 広島教区練成会

八月十二日に、幟町教会にて小学五年生から中学三年生を対象として、教区練成会が行われました。長引くコロナ禍にあって、昨年は中止でしたが、例年二泊三日のところを、今年は半日の企画にして行い四十名の子どもと、多くのリーダーが参加してくださいました。

例年、神学生が中心となって企画しており、今回は教会の塔の鐘の見学や、教皇フランシスコ来広の時使用された白い椅子に、実際に座ってもらうといった内容が中心で、消毒や換気の徹底、食事は四ヵ所に分散、全体でのレクリエーションは三十分に満たないようにする、など様々な配慮を必要としました。たった半日で楽しんでもらえるか気がかりでしたが、当日、元気いっぱいの子どもたちに会うと、すぐにその不安は無くなりました。当日配布されるしおりに、白浜司教様のメッセージが掲載されていました。一部ご紹介させていただきます。

「新型コロナのとくいわざ、それは人と人とを引き離すことです。それに負けて、私たちは互いに助け合い、支えあって生きていくことからも、遠ざかってしまってはなりません。（中略）この練成会が、子どもたちの健やかな成長のために、豊かな実を結びますように」。

練成会の一貫したテーマは「召命」です。「召命」とは、「見えないつながりに気づくこと」なのでしょう。この練成会を通して、多くの方々とつながっていること、支えてくださっていることをいつも肌で感じます。一粒会の皆さまをはじめ、関係者の方々に、あらためて感謝申し上げます。（伊藤 正広 神学生）

計55名の参加者たち

## 風紋

三十年ぶりの広島選出の首相。核兵器禁止条約批准をはじめとする「核なき世界基金」の役割を終わらせる政策への期待が高まる。同時に環境問題に対する社会の根本的な改革の実現をも私たちは望んでいる。この祈りよとどけ！（K・Y）

## ひと滴〈110〉

### 「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」

幟町教会　三宅 仁孝 神父

三月に叙階の恵みをいただき、半年が過ぎました。予定されていた初ミサや子どもミサの予定が流れてしまったり、講座が開講できなかったり、会議が中止やオンラインに変更されるなど、物事は予定通りにいかないものだなと改めて感じながら過ごしているとき、叙階カードの話をほとんどしていなかったことを思い出しました。今の状況が治まり、改めて話す機会はまだ少し先になりそうなので、ここで皆様に伝えていこうと思います。

私は叙階カードに載せるみ言葉に、「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」という、マタイによる福音書十四章二十七節のみ言葉を選びました。きちんと言うと、このみ言葉だけではなく、十四章二十二節から三十三節の『湖の上を歩く』という場面を選びました。この場面で、ペトロはイエス様に招かれて水の上を歩き、イエス様の方へ進んで行きます。しかし、強い風に気づいて怖くなり、沈みかけ、「主よ、助けてください」と叫びます。これに対してイエス様は、すぐに手を伸ばして捕まえてくださいます（叙階カードの御絵はこの場面）。最後は二人とも船に戻り、風も静まり、それを見た人々は、「本当に、あなたは神の子です」と言ってイエス様を拝むところでこの場面は終わります。

これから始まる司祭としての生活の中で、主の招きに応え様々な場所へと歩みを進めていくと思います。その歩む先は、道路のように歩みやすい場所、山道のように険しい場所、そして『湖の上を歩く』の箇所のように、水の上のように立つことも困難な場所に招かれ、歩むこともあると思います。そのような時、しっかりと主を信頼して歩んでいけるように、そして、沈みそうなときには、すぐに手を伸ばして捕まえてくださる方がいつも共にいてくださることを忘れることなく、司祭としての歩みを進めていきたいと思います。

司祭叙階式の時に配られた
叙階記念カードの絵